

「ありがとう、
ありがとう。
ありがとう、
先生！」

第3話

當眞嗣朗

「ありがとう、ありがとう。ありがとう、先生」

第3話

當眞嗣朗

「自分の一番嫌いなものがホントは一番好きって事が、あるの、女には。男には判らないわよね、でも、あるの。わたしはあの男がホントに嫌いだった。嫌な生徒だって心の底から憎んでた。厄介者だって。でもね、ホントは無性に惹かれてた。恋だったのよ。老いらくの恋って歳でもなかったけど、中学生と中年じゃね。今は後悔してる。でも当時は揺れてた。頭ん中がグラグラして、あの男に興味があつて。わたしはね、孤独ってものがどういふものか知りたかつた。彼を見てると孤独が、まるで一つの才能みたいに思えたの。昔から弱いんだよ、わたし。影の薄そうな天才肌の男に。学生時代からその手の男に恋焦がれて、あの男は極めつけだった。あの男と一緒にになりたいって思った。自分がないものを持つてゐるって、わたし、思ったの。一つになりたい。そのためには、孤独ってものを、その孤独っていうスゴイものを手にいれなきゃって強く思った。あの男が卒業した後も、後を追いかけていって気持ちが強くなって、それからしばらくしてあの男があんな事を仕出かして、その思いは絶頂に達したわ。どんなに老い

ても真剣だった。わたしはあの男と一つになるって。そして仕事を早期退職した後、家族に言ったんです。わたしは世捨て人になる。孤独を手に入れる。わたしは死んだことにしてくれて。全部、あの男に狂ったせいだった。もちろんそう簡単に自分の思い通りにはいかなかったわ。でもすつたもんだがあつた後で、家族はわたしを死んだ事にしてくれたの」

「それからわたしは都会のアパートの一室で孤独だった。絶対に外になんか出なかった。週に一度、家族が食べ物を持ってくる以外は誰も会わなかったし、近所付き合ひなんて心底軽蔑してた。そんなもん糞だつて。いつもベッドの上で毛布に包まってフロイト読んだわ。意味が判んなかった。頭の悪いヒト向けに書かれた本じゃなかった。でも頑張つて何度も何度も繰り返し読んだわ。汚物はほとんど垂れ流しだった。部屋の中はゴミだらけで、夏になると見たこともない虫が湧くの。その虫、食べたかもしれない。頭、どうかしてたのよ。そんな生活が何年も続いて、ようやく判ったわ。あの男は、ただのろくでなしだったって。やっぱりヒトとヒトは目に見えない鎖で繋がっているのよ。だから、それを断ち切つては生きていけないの。あの男は地域活動にもまったく参加しないって話を家族が調べて、わたしに教えてくれたの。冗談じ

やないって思った。ヒトは皆でエイサーを踊って、組踊りを
して、いろんな活動して生きてくものなのよ。それなのに、
あの男はそういう大切なものをまったく無視するのよ。わた
し、怖いわよ。そんな隠遁生活からようやく抜け出て、初め
てゴミ出しの日にゴミを捨てた時、何が起きたと思う？ 回
収業者のヒトが来てゴミを回収するんだけど、わたしの出し
たゴミだけ持ってかないのよ。いつまでもあるの。その恐怖
ってスゴイのよ。一気にね、社会が、わたしにソツポ向くの。
お前の事なんか相手にしないって。歯牙にもかけない。噂話
だっけする価値もないってね。怖かった。怖くて怖くて、わ
たし、近所の家を片っ端から訪ねて歩いて、詫びたの。孤独
はもう嫌です。だから仲間に入れてくださいって。土下座し
てお願いしたわ」

その女の話はトウマの気持ちを重くさせた。まるで過去の
記憶が悪霊となって現在に取り憑きはじめたかのようだった。
その悪霊たちは自らの姿を泥沼へと変え、平凡な日々を
地道に未来へと押しあげる人々の歩みを邪魔するのだ。誰も
がその悪霊に文句を言っている。その苛立った声が耳に届く。
なんて煩わしい、とトウマは思う。現在は過去と未来を繋い
でいる。その繋ぎ目に摩擦が生じるのは判るとして、何故、

我々は過去と未来を手放せないのだろうか？ それが出来
たらきつと、あらゆる迷いが消える。死んで遺体となった人
間も人生に感謝するようになる。それが出来ないのは、逆説
的に、俺たちが死んでいるからだ。悪霊となって今に取り憑
いているのだ。トウマはそんな事を考えながら、話を終えて
まだ物足りない様子の女に礼を言った。謝礼を渡し、女と別
れた後、トウマは急に胃がムカつくのを感じた。数年来の体
調不良だった。

身体の奥深くに沼が現れたような感じだった。その沼の水
はひどく汚れていて、気味の悪い魚が泳いでいた。トウマは
雑踏の中、背中を丸めて歩いてきたが堪えきれず、近くのビ
ルの陰で身をかがめた。どれだけええずいても何も吐き出すこ
とが出来なかった。その代わり唾液だけが不快な粘り気と共
に口中に広がった。さて、とトウマは青白い顔で呟いた。質
量を欠いた声だった。さて、これから俺はどうするんだった
かな、と。彼は屈みこんだ姿勢のまま、通りを行き交う人々
を空ろな瞳で眺めた。ヒトとヒトは目に見えない鎖で繋がっ
ている。そのはずだ、とトウマは心の中で呟いた。俺の身体
から伸びた鎖は、確かにこの見知らぬ人々と繋がっているの
だ。そのはずだ。しかし通りを行き交う誰もが彼の不調に気

付かない。

人間は現在を維持するために未来へと向かう運動体だ。その廃棄物として過去を生み出す。否、未来など関係ない。過去を生み出すために苦しんだ結果、今があるだけだ。俺はこの数日間、幾人もの人間に会い、バットの助力を得て、あの男の情報を集める事に努めた。あの男の廃棄物を集めるのが俺の仕事だった。組織の上層部に命じられて、従うことを強いられた。それで、俺はあの男の何を知ったというのだ？あの男のガラクタを前に、現在に一步でも近づけたのだろうか？そこにあるのは空洞だけではなかったか？この世界にぽっかりと空いた空洞。空しい風だけが吹きぬけていく。心地よい風、と誰かは言うかもしれない。しかしその風はどこかで誰かの心を冷え込ませているのだ。トウマはそう考えながら、ゆつくりと立ちあがった。そして観光客で賑わう那覇の街をゆつくりとした歩調で歩きはじめた。この奇跡のマイルは、今ではただのレプリカ、テーマ・パークに過ぎない。そこでは金がヒトを繋いでいる。もう奇跡は起きない。ハリウッド映画のエキストラたちが、自分こそが主役だと錯覚している。実に残念な現実。

先月の今頃、とトウマは考えた。俺は無職だった。何度かハローワークに通って、失業者たちの数と職員の冷たい視線に脅えながら、改めて現実の重さに衝撃を受けた。景気の動向など関係のない世界がそこにはあった。今は万遍なくヒトが使われる時代ではない。ヒトが選別される時代なのだ。面接官に最終職歴の後の就職活動の詳細を問われる度に、トウマは泣きそうになった。最終職歴の後に五年のブランクがありますね、と彼らは見下すような眼差しで言う。その間、何を為さっていたのですか、と。彼は正直に答える。小説を書いていました。面接官が明らかに不快な表情をする。あなたの書いた作品は、何かの賞を受賞するとか、大手出版社から企画出版されることがあったのですか？それによって幾らかの収入があったのですか？トウマはすっかり脅えた表情でかぶりを振る。その長い五年間、小説を書く事でわたしの生活に何らかの変化が起きるような事はありませんでした。もちろん収入なんて一円もありません。面接官の顔が真っ赤になる。彼は殺気立った声音で言う。はっきり言って、あなたを雇用する会社は、もうどこにもありませんよ。

仕事が出来なかったわけじゃない、とトウマは考えた。むしろよく出来たほうだと。その仕事はやりがいがあったし、

働く喜びがあった。地道に小説を書き続けていれば、いつかは新人賞を受賞してデビュー出来る日も来るだろう。自信があった。しかし今、俺はもう若くない。夢や理想を語るには適さない環境で生きているのだ。トウマはそう考えて、ため息を吐いた。俺より出来ない奴が文芸業界で大きな顔をしている事実が彼を苛立たせた。ソイツが連載していた新聞小説を読んで、泣きたくなった。多くの読者はそれを読んで、若いヒトの書くものはよく判らない、という感想を持つようだった。しかしトウマには判った。それは単に実力がないだけなのだ。ソイツは人一倍の努力さえせず、大物ぶっているのだ。ソイツを若手のホープと持ちあげる新聞社にも腹が立った。そんな見る目のない人間が基地問題で騒いでいるのを見るたび殴りつけたくなった。

数年前、交際相手と派手な喧嘩をして別れた。相手はとにかく彼を束縛しようとした。鎖でがんじがらめにして、生活のすべてを管理しようとしていたようだった。この手の女は、三流のテレビドラマのような安っぽい夫婦生活を演じて、恋人を食い潰していくのだ。トウマはそう思って、この繋がりを絶とうと考えた。しかしその数カ月後、これが決して絶つ事の出来ない繋がりがりだったと知った。彼は衝撃を受けて、沈

黙した。

かつてトウマは北部にある小さな食品スーパーで働いていた。その店は戦後、間もない頃に開店したもので、今では観光地のひとつとにさえなっていた。そこでの彼の立場は正職員ではなく、アルバイトだった。その会社で彼は浮いていた。そこは沖繩でよく見られるようなルーズな経営体制を取っていた。仕入れても売らなくていい、が合言葉で、職員たちは就業時間、好き勝手な事をやっていた。それで店の売り上げは全盛期の三分の一にまで縮小していた。トウマはその事態を改善しようとした。しかし結果として、すべての職員の激しい抵抗にあった。職員だけではない。その地域一帯の人間が彼を白眼視するようになったのだ。その果てに彼の心は折れたのだった。その時に彼は思った。もう俺は二度と、職に就く事は出来ないだろう、と。真面目に働く従業員ほど冷遇される会社って一体何なんだ？ 意気消沈した彼に更に追い討ちをかけたのは、そんな会社でもいざ、経営不振が深刻化すると、行政がすぐに援助の手を差し伸べた事だった。それがトウマには納得いかなかった。あれだけ努力した俺が評価されずに職を追われ、怠けていた同僚たちが行政の支援を受けて平然と給料をもらっているのだ。そう考えると馬鹿

馬鹿しくなった。それから五年間、トウマは自宅にこもって、小説だけを書いていたのだ。

春、文学カフェという催しが県立博物館であった。芥川賞を受賞した県出身の作家と、直木賞を受賞した日本の作家が、観客の前で互いの文学観について語らうというもので、根っからの文学好きであるトウマは喜んでそれに参加した。彼らと住んでいる土地は、書店はおろか図書館さえない土地で、誰も文学など興味を持っていなかった。だから彼は文学について語らう相手を欲していたし、またその話が聞けるチャンスがあれば、積極的に参加したいと思っていた。催しの最中、トウマは煩わしい日々の雑事から解放されていた。観客の大半が熱心にメモを取っているのが彼には不思議だった。文学の世界で成功した作家が目の前にいるのに何故、そこから目を逸らすのだろうか、と。その時ばかりは彼は孤独ではなかった。文学という目に見えない鎖が、彼を世界へと繋ぎとめていたのだ。

統治下での双子の成長を描いた作品は、英語圏で紹介されるべきだ、とさえ考えていた。入場の際にその傍を通る時、トウマは心密かに願った。ちよつとした奇跡が起きて、俺に声をかけてきてくれないか。キミ、ひよつとして毎回、新人賞に応募してくるヒトじゃない？ 僕はキミの作品を高く評価しているんだよ、だからこれからも書き続けてほしいな、キミはいずれ大成するよ、等と。もし声をかけてくれたら、何かが変わりそうな気がする、と彼は思った。しかしその時は訪れなかった。落胆はしなかった。それが現実だ、と自嘲気味に思った。俺の生きている世界と、あちら側とは、まるで繋がりが絶たれているのだ、と。催しが終了した後、トウマはすぐに席を立った。帰りにジュンク堂によって、洋書を購入しよう、と思った。それが彼のささやかな愉しみだった。会場を出る際、沖縄の文学関係者が、彼の近くの席に座っていたある若い作家に挨拶をしているのが見えた。トウマはそれが不快だった。その若い作家は、県内では有名で、自費出版だがすでに三冊の著作があった。新聞に連載を持っていることもあり、ネット・マガジンに積極的に作品を発表していた。しかしトウマは、彼の書くものにはまるで知性を感じなかった。マトモな作家だとは思えなかった。それなのに、多くのヒトが彼に挨拶をしていた。彼は繋がっていた。彼の築

きあげたネットワークは強固だった。その中で彼は将来を囁望されているようだった。

空しい気持ちで博物館の外に出た時、見知らぬ男がトウマに声をかけてきた。その男は仕立ての良い黒いスーツを着て、名刺を差し出してきた。

「株式会社アドバンス・フューチャー・コンストラクション人事部の者です。もしお時間がおありでしたら、少しお話をしませんか？」

トウマは隣の大型ショッピング・センターの喫茶店で男の話を聞いた。

「我々はあなたのような人材を探していたのです」

と、男は言った。我が社で働いてみませんか、と。金に困っていたトウマはすぐに快諾した。翌日には研修に参加させられた。那覇市内のビルの一室にトウマと歳が変わらない見知らぬ男女が大勢、集まっていた。そこでは起床から就寝までの時間が徹底的に管理され、礼儀作法や挨拶の仕方を叩き込まれた。まるで軍隊のような教育システムだった。それが一ヶ月続いて、多くの人間が脱落していった。しかしトウマは最後まで残った。挫けそうになるとすぐに担当の男がやってきて、キミは充分な能力があるんだよ、それなのにキミは

それを出し切ってはいない、やれば出来るのにやろうとしない、我々はキミの能力を高く評価しているんだ、キミはこんな所で諦めるのかい？ 冗談じゃない！ キミは将来、確実に成功する人間なんだ、象だつて判る、と勇気付けてくれた。大半の人間は、それで奮起した。なにより途中で辞めたら、研修を受けるために会社に支払った高額の費用が無駄になるからだ。そして最後に、トウマは命じられた。本採用を決めるための試験として自分史を書いてほしい。作文を書くことは得意だった。しかしその会社の担当者が要求するのは、トウマに関する情報のすべて、だった。どこで産まれ、どういう交友関係を持ち、何をやって生きてきたのか？ 思想はどうか？ 趣味は何か？ 銀行の口座にどれくらいの預金を持つているのか？ そのすべてを原稿用紙に書け、というのだ。我々が欲しいのは個人の持つすべての情報だ、それで個人を包囲して支配するのが我々のやり方なのだ、と。

自分について徹底的に調査して欲しい。そしてそこで得た情報をすべて我々に提供してほしい。そうすれば我々のネットワークはより強固なものになる。その中でキミは相応のポジションを得ることになるだろう。

それでトウマは探偵まがいの事をはじめた。

いずれは人類にとつて破滅の日が来ると思っていた。それはきつと米軍基地に起因するものに違いないと決めていた。しかし実際は違った。終わりの始まりは、憲法が改正された事だった。それによつてまず表現の自由と結社の自由が奪われた。そして国は個人の思想や情報を徹底的に統制するようになった。企業には従業員の情報を国に提出する義務が課せられた。より多くの情報を提供した企業に、国は優先的に仕事を発注するようになった。そうやつて人類の破滅の日が到来したのだ。トウマはそう考えていたが、それを実際にクチに出して言うことは出来なかった。言えば即座にその情報は特殊なネットワークを通じて国に伝わり、相応の制裁が加えられるのだ。しかし今や、個人情報すべてを企業側に提出しなければ、就職する事も叶わない。そのために彼は学生時代の教師に会い（彼女たちは成人した彼の顔を特定できず、まるで死人について語るように喋るのだった）、バットの力を借りて情報を集めた。それでもトウマは、自分というものがよく判らなかつた。俺は一体、何者なのだ、と思つた。自分を語れと言われたら迷わずに、出来損ないです、と答えるしかなかつた。誰からも相手にされない小説書きなのだ、と。

業界でも無視される。しかしそれではどんな職業にも就けない。トウマは自分を知れば知るほど、孤独が深まるのを感じた。彼は誰とも繋がつていなかった。繋がりがこそが、この世界では大切なものなのに。

日が沈んだ後、トウマは自宅に戻つて、衣服を着替えずにベッドに横たわり、このまま死ねれば良いのだが、とぼんやり思つた。しかし生きている人間が自ら死ぬのは、それほど簡単じゃない。生との繋がりを断ち切るためには相応の苦痛が必要で、そのためには強固な勇気と覚悟が必要だった。トウマはそれを成し遂げた人間を何人か知つていた。彼らはすべての繋がりを捨てて、この世を去つた。しかしそれは仮初めだ、とトウマは思つていた。すべてを投げ打つて自殺しても、残された遺族には深い悲しみが残される。それはきつと死者をも拘束する鎖なのだ、と。少なくとも俺は、彼らの事を憶えている。俺は結局、そこに横たわる死体なのだ、と思つた。生きてはいるが、誰とも繋がりを持てない。それは死んでいる事と同義なのだ。

やがて眠りが差し込んできた時、携帯電話が鳴つた。画面表示を確認すると、念のために連絡先を伝えていた小学校時

代の担任教師だった。先日、話を伺った女教師だ。何だろう、とトウマは思った。ひよつとしたら誰にも話していないあの男に対する恨み言を思い出したのかもしれない。だとしたら、その情報も聴取しなければいけない。トウマは幾分、億劫な動きで半身を起こし、ベッドに腰かけたままの姿勢で、通話ボタンを押した。女教師の品の良い優しい声音が聞こえてきた。

「あの、突然、お電話してごめんなさいね。でも、あなた、だいぶ暗い顔をしていたから、ずっと気になっていたの。ひよつとしたら何か困っている事があるんじゃないかって。それで、あの子の話聞きに来たんじゃない？ 違う？ あこの、無遠慮で、余計なお世話かもしれないけど、あなた、ちゃんと眠れている？ わたしね、将来、カウンセラーの資格を取ろうと思っっているいろいろ情報を集めているの。まだ駆け出しだからわたしじゃ駄目だけど、わたしの知っているヒトに良いカウンセラーがいるから、もし良かったら、紹介してあげられるわよ。どう？ あのね、わたし、教員時代に子供たちにずっと言ってきた事があるの。それはね、ヒトとヒトは目に見えない鎖で繋がっているって事なの。わたしの幸福がどこかで誰かの不幸に繋がっている場合もあるし、わたしの親切

心が誰かを傷つけることもあるのよ。どこかで誰かが笑っていたら、別の場所では誰かが泣いているしね。それは、自殺で亡くなったわたしの兄が、わたしによく言っただけで聞かせていた事なのよ。言わば、兄の遺言。兄はエイズだったの。たった一度の性交渉で感染したのよ。相手の男のヒトが本当に好きで、どうしても繋がりがかったのね。それでね、わたし、その事、子供たちにも判ってほしいなって思っただけで、初めての担当のクラスを持った時から、子供たちに言ってきたの。忘れないでねって。それって大切な事だし、先生と生徒の関係って、卒業しちゃうとそれつきりでしょう？ でも本当は繋がっているんだよって事を判ってほしくて。皆、忘れていかもしれないけど。だから突然、お電話をしてご迷惑だと思っただけで、もし困っている事があるなら、わたしでも力になれる事があるのよ。だから――」

忘れるわけじゃないか。憶えているよ、すっかり、あなたの言った事、今でもはつきり、忘れてないよ。トウマは女教師の声を聞きながら、涙が溢れだすのを止められなかった。憶えている、忘れない、と彼は思った。忘れるはずがない、と。俺は先生の事が好きだったんだ。だからいつも休み時間は先生の傍にいた。でも先生は俺の気持ちに気付かなか

った。だから俺は最後、あなたに言ったんだ。「先生はぼくの事を無視していた」って。今では俺もエイズになってしまった。

鼻をすすりあげた時、女教師が言った。

「泣いているの？ ごめんなさい、わたし、あなたを傷つけたかもしれない」

いや、とトウマは思った。感激と呼ぶにはあまりにも複雑で熱い思いが胸に込みあげていた。ヒトとヒトは繋がっている。それは俺にとつての呪縛だった。俺が心の底から欲している、決して手に入れる事が出来ないものだった。でも、先生。トウマは声には出さずに言った。確かにヒトとヒトは繋がっているんだね？ 目には見えない繋がりが、こうやって、あなたと俺を結んでいるんだね？ 俺もまだまだ誰かを愛せるんだよね？

トウマは涙声のままに言った。

「ありがとう。ありがとう。ありがとう、先生」

終わり